様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　８ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６９８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ１０５１９

研究課題名（和文）急性期病院入院中の認知症高齢者を対象としたボランティア活動のシステム構築

研究課題名（英文）Build a system of volunteering for elderly people with dementia being in an acute medical hospital

研究代表者
山本　君子（Yamamoto, Kimiko）

東京純心大学・看護学部・教授

研究者番号：００６２２０７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、急性期病院に入院中の認知症高齢者を対象に、認知症サポーターによる話し相手や見守りのボランティア導入システム構築のための示唆を得ることである。
介入後、急性期病院入院中の認知症高齢者の表情が穏やかになる傾向が認められたことで精神的ストレスの緩和に繋がることが示された。病棟看護師より、危険行動や離棟・離院の防止に繋がったとの意見を得た。しかし、認知症サポーターにとっては、急性期病院という特殊な環境における話し相手や見守りは想定以上にエイジズムや認知症を意識し、緊張感を高めてしまうこと、また、認知症高齢者の傷病について想像以上に意識し、不安を増長していることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　急性期病院は、在院日数短縮化と入院患者の高齢化・認知症化により、看護師の認知症対応力向上が求められている。一方で診療の補助業務に追われ認知機能低下高齢者との関わる時間を十分とれていない状況もある。
　本研究の意義は、入院中の高齢者の認知機能低下を予防するために、限られた人数の対応では困難をきたしているため、認知症サポーターのボランティア活動を提供できる方法を模索することである。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to get a suggestion for building a system of volunteering which supporters for dementia are as conversation partners and watch over for elderly people with dementia in an acute medical hospital.
Introduce of volunteering is connected with relief of symptoms,which showed that their faces seemed to be calm. Ward nursing staffs gave opinions that volunteering made them be awake during the day and prevented them from doing dangerous acts or leaving their ward and hospital.However, volunteering in unusual circumstance was beyond imagination what it made supporters nervous about agism and dementia,be afraid of symptoms of elderly people with dementia.

研究分野：高齢者看護

キーワード：認知症サポーター　高齢者　ボランティア　見守り　話し相手　急性期病院

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

わが国は、世界に先駆けて超高齢社会に突入し、2025年には65歳以上の認知症患者は700万人（5人に1人）と推計されている。このような現状から、厚生労働省は、認知症の人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けることができる社会の実現を目指すことを目標に、2015年1月に認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）が策定されている。新オレンジプランは、7つの柱をもとに構成されている。そのうちの「2.認知症の容体に応じた適時・適切な医療・介護等の提供」の中に「行動・心理症状behavioral and psychological symptoms of dementia（BPSD）や身体合併症等への適切な対応」を進めるために一般病院の認知症対応力向上を掲げている。急性期病院では、認知症をもつ高齢者患者が増え集中治療と介護が混在した状況があり、また、在院日数短縮化に伴う看護業務量が増大している。このような急性期病院の看護師が認知症高齢者との関わりで困難している事には①急性期病院なのでゆっくり関わっている時間がない②何回も同じことを聞かれてイライラした③厄介だなって思ってしまうことがある④どのように看護していけばいいのか分からないと言った声が聞かれ、「本当はゆっくりと優しく関わりたいけれどつい素っ気なく対応してしまう」というジレンマを抱えている(千田ら, 2014)などが報告されている。本研究においては、入院による高齢者の認知機能低下を予防する一つの方法として、認知症サポーター養成および傾聴ボランティア養成を実施し、急性期病院に入院中の認知機能低下した高齢者への「見守り」や「話し相手」を提供するシステム構築を行った。

2. 研究の目的

研究の目的は、急性期病院に入院中の認知機能低下した高齢者の「見守り」と「話し相手」に関するネットワークの基盤を構築し、急性期病院で期待される認知症サポーターがボランティアとしての役割を担えるよう人材育成のためのしくみづくりである。

3. 研究の方法

⑴ 研究の方法

研究は以下に示す2つの方法を用いて取り組んだ。

1) 研究Ⅰ：認知症サポーターによる話し相手や見守りのボランティア活動運用の現状分析

65 歳以上人口の多い都道府県上位 10 の 200 床以上の急性期病院の看護師を対象に、認知症サポーターによる話し相手や見守りのボランティア活動の必要性の有無についてアンケート調査を実施し現状分析について明らかにした。

① 調査対象

65 歳以上人口の多い都道府県上位 10 の 200 床以上の病院の中から協力の得られた 78 病院を対象とした。

② 調査方法

調査は、無記名自記式調査票調査を郵送法にて実施した。

③ 調査内容

質問項目は、基本属性として年齢・性別・経験年数、自由回答項目は「勤務中自分の代わりに認知機能低下高齢者と向き合う人が欲しいと思う場面について具体的に記入してください」とした。基本属性は、集計処理し、自由回答の記述は、客観的分析のために KHcoder を用いて計量テキスト分析を行った。

④ 倫理的配慮

東京純心大学倫理審査委員会の承認を得て実施。

⑤ 分析方法

SPSSver. 25 を使用し基本統計処理後、KHCoder にて共起ネットワークによる語彙の関連性分析を行った。

2) 研究Ⅱ：認知症サポーターによる話し相手や見守りのボランティア活動実施と検証

研究Ⅰの調査結果を参考に、急性期 A 病院に入院中の認知機能低下した高齢者対象に認知症サポーターによる話

し相手や見守りのボランティア活動実施し、効果を患者側･看護師側の視点で検証した。また、認知症サポーターによるボランティア活動実施後のインタビューによる効果を検証した。

⑴ 対象

① 急性期 A 病院に入院中の認知機能低下した高齢者 27 名に、認知症サポーターによる話し相手や見守りのボランティア活動を実施した。認知機能低下した高齢者の年齢は、80 歳～95 歳、性別は、男性 14 名、女性 13 名であった。

② 認知症サポーター12 名が急性期 A 病院に入院中の認知機能低下した高齢者の話し相手や見守りのボランティア活動を実施した。認知症サポーターの年齢は、30 歳代 1 名、40 歳代 3 名、50 歳代 7 名、70 歳代 1 名であり、男性 3 名、女性 9 名であった。

③ 認知症サポーター介入後の病棟看護師 46 名に自由記述の質問紙調査を実施した。病棟看護師の年齢は、25 歳代～45 歳代であり、看護師経験 3 年～20 年であった。

⑵ 調査内容および分析方法

①認知症サポーターによる話し相手や見守りのボランティア活動は、急性期A病院の看護部により各病棟看護師長への依頼をし、患者選択および患者からの同意を得てもらった。認知機能低下した高齢者は、1 日当たり 3 名～6 名とし、午前 10：00～11：00 と午後 15：00～16：00 の時間に介入した。

認知症サポーターによる話し相手と見守りのボランティア活動の時間は、ベッドサイドで 30 分～60 分間であった。

②認知症サポーターによる話し相手や見守りを受けた 35 名に、実施前後に、心拍変動解析による自律神経活動の測定を実施した。(加速度脈波測定器 TAS9VIEW(YKC 社)を使用した。分析方法は、SPSSver. 25 を使用し基本統計処理後、2 群間の比較には、paired t-test を用いた。

③急性期 A 病院の看護師の質問紙調査項目は、認知症サポーターによる話し相手や見守りのボランティア活動が有効であったと感じた場面、認知症サポーターによる活動が有効でなかった場面の 2 点についてあった。

④ 認知症サポーター12 名中 5 名を対象に「話し相手や見守りに際しての緊張や不安」「対面時の患者の様子」「話し相手となった時の内容」「話し相手や見守りによる患者の変化」につ

いてグループインタビューを実施した。録音しインタビューデーターより逐語録を作成した。

分析方法は、大谷 [1]が開発した質的データ分析手法の SCAT (Steps for Coding and Theorization) を用いた。SCAT は小規模な質的データ分析にも有効で、分析過程が明示化されるため分析者自身が分析の妥当性を確認できる利点がある。『傾聴に際しての緊張や不安』に着目し、①データの中の着目すべき語句 ②それを言い換えるためのデータ外の語句 ③それを説明するための語句 ④そこから浮かび上がるテーマ･構成概念の順にコードを考案していった。分析内容の信頼性･妥当性は共同研究者間で確認した。

文献

1) 大谷尚：4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案 ―着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き―. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 教育科学, 54(2)：27-44 (2008)

⑶ 倫理的配慮

所属大学の倫理審査および実施病院の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

⑴ 研究Ⅰ

1) 看護師が認知機能低下高齢者に対して話し相手や見守りを必要とする場面についての意識－KHcoder による計量テキスト分析－

結果：協力の得られた 78 病院に 312 部の質問紙を配布し、235 部回収した (回収率 75.3%) 。有効回答は 182 部 (有効回答率 77.4%) で、基本属性の内訳は、男性 8 名、女性 174 名、平均年齢 40.16 歳 (SD=9.15) 、平均経験年数 16.54 年 (SD=8.65) 。自由回答の記述された内容における語彙の出現回数について分析した。助詞･助動詞を除く

総抽出語数（使用）は 5,273（2,353）語、異なり語数（使用）は 666（511）語であった。また出現回数の平均は 4.60 回(SD=11.98)であった。頻出語は「患者：106 回」「出来る（含：出来ない）：50 回」「対応：47 回」「時間：40 回」「他：38 回」「認知：30 回」「必要：24 回」「危険：22 回」「夜間：18 回」「転倒：17 回」「話：17 回」などであった。

考察： 入院中の認知機能低下高齢者に対して看護師が話し相手や見守り相手を必要とする場面については、上位頻出語の具体的内容を確認すると、認知機能低下高齢者との関わる時間が不足していると認識していることが明らかになった。

2）看護師が認知機能低下高齢者に対して話し相手や見守りを必要とする場面についての意識調査－KHCoder による語彙関連分析－

結果：78 病院 312 部の質問紙配布に対し回収率 75.3%、有効回答率 77.4%。基本属性の内訳は男性 8 名、女性 174 名、平均年齢 40.16 歳（SD=9.15）、平均経験年数 16.54 年（SD=8.65）であった。看護師が対応者を必要と思う頻度で〈非常にある〉に出現し関連の強い語彙は「ナースコール」「聞く」「トイレ」「説明」「目」であった。〈ある〉では「離れる」「自己」「抜去」「低下」「機能」「行動」「点滴」「夜間」であった。〈時々ある〉では「思う」「徘徊」「人」「場合」であった。〈非常にある〉と〈ある〉に共通したのは「認知」「危険」「転倒」「何度」「ケア」。すべてに共通したのは「出来る」「対応」「時間」「他」「必要」であった。

考察：〈非常にある〉〈ある〉に関連した語彙の具体的な記述内容から、「認知」「機能」低下による「何度」も「説明」を要すること、「ナースコール」や「トイレ」の「対応」が「何度」もあり、「転倒」の「危険」や「点滴」の「自己」「抜去」などの「危険」回避のために、認知機能低下高齢者と向き合う人が欲しいと認識していることが明らかになった。

⑵ 研究Ⅱ

1）急性期病院入院中の認知機能低下高齢者への傾聴ボランティアの効果：自律神経活動による評価

結果：分析対象人数 35 名（男性 18 名女性 17 名）。年齢 80 歳～95 歳。話し相手もしくは見守り時間の平均 38.9 分（最小時間 25 分最大時間 58 分）。心拍数の平均値は前 73.63±14.88 回/分・後 74.29±13.77 回/分、fatigue（身体的疲労度適正値 50～60）前 54.86±20.39・後 56.43±18.84、 balance 前-8.60±19.03 ・後−5.51±18.20、stress（適正値 1～3）前 3.43±3.22・後 3.49±3.43、 resistance（抵抗力適正値 25～35）前 26.34±8.93・後 26.26±8.52、自律神経活動度（SDNN 適正値 30～100）前 131.58±120.26・後 115.97±106.69、自律神経バランス（LF/HF）前 0.95±0.30・後 0.99±0.28 で 2 群間に有意差はなかった。

考察：2 群間の比較の結果、傾聴の前後で自律神経活動のパラメータに有意差はみられなかった。自律神経の balance では傾聴後交感神経寄りであること、LF/HF≧1.00 を交感神経優位、LF/HF＜1.00 を副交感神経優位とした場合の先行研究と同様に傾聴後に交感神経優位寄りになっていた。自律神経活動と BPSD の関連では副交感神経優位であることから、傾聴後に交感神経寄りの結果を示しているということは、傾聴により精神的ストレスは緩和傾向を示しているとも言える。SDNN の減少は自律神経活動過多であった活動が円滑傾向つまり穏やかになる傾向を示したとも言える。

結論：傾聴の効果を自律神経活動のパラメータから評価するには課題があることがわかった。一方で認知機能低下高齢者の傾聴前後の自律神経活動の特徴を明らかにすることができた。

2）－認知症サポーターへのインタビューから考える－

結果：インタビュー内容：グループインタビューは、『傾聴に際しての緊張や不安』、『対面時の患者の様子』、『傾聴の内容』、『傾聴による患者の変化』の4項目について実施したが、テクストデータの最も豊富であったのは『傾聴に際しての緊張や不安』についてであった。『傾聴に際しての緊張や不安』についての SCAT 分析の一部を示す。

表1：SCAT 分析（ステップ1～ステップ4）

1：注目すべき語句	2：:語句の言い換え	3：説明するテクスト外の概念	4：テーマ・構成概念
おしっこに連れて行ってと言われ、ナースコールをしてしまって、ということがありまして。そういうこと（管が入っていること）がわかっていないと看護師さんに負担をかけてしまったりその辺がちょっと、それが最初だったので、1回目からちょっと緊張しました	想定外の対象者の状況 それに対する行動 目的外の行為に対する反省 スタッフへの配慮	限定された情報（医療的情報不足） 想定外の対応 不本意な対応（スタッフの負担軽減とは逆になっていることへの反省）	想定外の対象者の状況と反応に対する自身の行動が引き起こした結果に対する反省
そんなに緊張していなかったんですけども。やはりどの病状かがあまりよく分からなかったので骨折とかだと話せるかなとは思ったんですけど、やっぱり内臓系の病気だとその話すことで体に負担がこないのかなという気がかりを持ちながらお話させていただいた 横になって話すよりは座って話した方がいいのかな	見えない症状に対する影響 内臓疾患に対する傾聴時間の影響に対する不安 何気ない仕草に対する影響 傾聴時の対象者の姿勢	想定できないことに対する不安 傾聴に適した姿勢の提示	想定できないことに対する不安 具体的な指示

ストーリーライン：『緊張や不安』は傾聴ボランティア自身が《想定できること》と《想定できないこと》の 2 カテゴリーで構成された。《想定できること》は病院という〈特殊な環境〉は〈エイジズム〉や〈認知機能低下〉に対して想定以上の不安を生み、《想定できないこと》では〈限定された情報〉による〈不本意な行為〉や〈行動の制約〉に対する困惑や諦め、〈医療処置時の対応〉や〈スタッフコールのタイミング〉に必要以上の緊張感を持っていた。

考察と結論：病院以外で高齢者や認知症者の傾聴ボランティア経験のある認知症サポーターにとって、急性期病院での認知機能の低下した高齢者の傾聴ボランティアは、特殊な環境における傾聴と捉えていることがわかった。そのため、想定以上にエイジズムや認知症を意識し、緊張感を高めてしまうこと。また、病院に入院していることで、認知機能の低下した高齢者の傷病についても想像以上に意識し、不安を増長していることもわかった。さらに、患者情報は氏名・性別・年齢のみの提供つまり限定された情報提供の中での傾聴は、傾聴ボランティア自身の不本意な対応の誘因や、行動の制約に対する諦め感を持たせる誘因になることもわかった。

地域包括ケアシステムの中では病院、施設、家庭での行き来は日常的な出来事である。そのため、病院における傾聴ボランティアも施設や家庭での傾聴と同じように日常的な行為として捉えることができるようなシステム構築が必要であると考える。今後継続的に認知症サポーターによる傾聴ボランティアを導入する際には、想定できる不安や想定できない不安の解消を念頭においた調整も必要であることが示唆された。

今後の研究においては、急性期病院に入院中の認知機能低下した高齢者への「見守り」と「話し相手」が効果的であったことを踏まえ、基本的な医療知識や患者の経過を知る者として、退職後の看護師とともにアクションリサーチの手法を用いて、急性期病院に入院中の認知機能低下した高齢者への見守りや話し相手のボランティア活動を発展させ継続していく予定である。また、生理学的指標である自律神経測定器を用い再度科学的に検証したい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 塚本都子，大津山優葵，山本君子	４．巻 第4号
２．論文標題 認知症サポーターの養成および認知症高齢者との家族へのボランティア活動に関連した文献検討	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東京純心大学紀要　看護学部　第4号	６．最初と最後の頁 17-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 YAMAMOTO Kimiko、HIRAKAWA Miwako、OMORI Chigusa、Sato Tomoko、AMANO Masami、SATO Yukiko、OTA Junko、MATSUZAKI Saori、INOUE Yoshiyuki、TAKEUCHI Takahito	４．巻 15
２．論文標題 Study of “Individuality” on Nursing Care Job	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Asian Journal of Human Services	６．最初と最後の頁 52～65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14391/ajhs.15.52	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 YAMAMOTO Kimiko、HIRAKWA Miwako、AMANO Masami、OHMORI Chigusa、SATO Yukiko、SATO Tomoko、OHTA Junko、MATSUZAKI Saori、INOUE Yoshiyuki、TAKEUCHI Takahito	４．巻 16
２．論文標題 Construct of “Individuality” Perceived by Nursing Care Workers:	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Asian Journal of Human Services	６．最初と最後の頁 58～67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14391/ajhs.16.58	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 Miwako HIRAKAWA, Kimiko YAMAMOTO, Masami AMANO
２．発表標題 A review of literature on the activities of the dementia supporter In Japan
３．学会等名 アジアヒューマンサービス学会学術大会，2019，　済州島
４．発表年 2019年

１．発表者名 塚本都子，大津山優葵，山本君子
２．発表標題 認知症サポーターの養成および認知症高齢者と家族へのボランティア活動に関連した文献検討
３．学会等名 看護教育研究学会学術集会，2019，東京
４．発表年 2019年

１．発表者名 山本君子，平川美和子，清水典子，佐藤智子，佐藤ユキ子，太田純子
２．発表標題 家族の介護負担感と精神的回復力との関連－認知症高齢者の介護を想定した場合－
３．学会等名 日本ケアマネジメント学会研究大会，2019，仙台
４．発表年 2019年

１．発表者名 平川美和子，山本君子，清水典子，佐藤智子，佐藤ユキ子，太田純子
２．発表標題 家族の介護負担感と生活環境との関連－認知症高齢者の介護を想定した場合－
３．学会等名 日本ケアマネジメント学会研究大会，2019，仙台
４．発表年 2019年

１．発表者名 平川美和子，工藤雄行，高祐子，石沢幸恵，山本君子
２．発表標題 施設で暮らす認知症高齢者の情動機能とBPSDとの関連
３．学会等名 日本在宅ケア学会学術集会，2019，仙台
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	平川　美和子 (Hirakawa Miwako) (50775244)	弘前医療福祉大学・保健学部・教授 (31107)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関